

民主主義のつくり方  
目次

はじめに 11

■ 民主主義への不信 ■ 〈ヘルソー型〉民主主義の隘路 ■ 主権論を越えて  
■ プラグマティズムとは何か ■ 習慣の重要性 ■ 本書の構成

## 第1章 民主主義の経験 27

1 アメリカという夢 28

■ 「想像力の夢見る場所」 ■ 民主主義の経験 ■ イソノミア  
■ トランセンデンタリズム ■ トランセンデンタリズムと民主主義  
■ 民主主義に先立つ「何か」

2 プラグマティズムと経験 42

■ 経験とは何か ■ オリヴァー・ウエンデル・ホームズ ■ ウィリアム・ジェイムズ  
■ 「多元的宇宙」と「純粹経験」 ■ ジョン・デューイ

3 戦後日本における経験 55

■ 経験の消滅 ■ 戦後日本の経験 ■ 『災害ユートピア』 ■ 経験との出遣い  
■ 丸山と藤田

## 第2章 近代政治思想の隘路 69

1 閉じ込められた自己 70

■ 独特な人間像 ■ 「緩衝材で覆われた自己」 ■ 内面への撤退 ■ 内面と外面の分離

2 依存への恐怖 83

■ 政治思想史のなかの依存 ■ 現代政治哲学と依存 ■ ケアの倫理学  
■ 主権の確立と依存の排除 ■ 依存のパラドクス ■ 相互依存的な自由

3 狭まった対話の回路 96

■ ホッブズの場合 ■ ロールズの場合 ■ 経済学的思考の優位

■なぜ政治は嫌われるのか

### 第3章 習慣の力 111

#### 1 偶然から秩序へ 112

■ハビトゥスと習慣 ■パースの生涯 ■習慣によって生まれる宇宙の秩序  
■自己修正する習慣 ■知は社会的である

#### 2 習慣と変革 125

■ジェイムズとサンフランシスコ地震 ■ジェイムズの生涯 ■ジェイムズの習慣論  
■デューイの習慣論 ■習慣と変革

#### 3 民主主義の習慣 138

■プラグマティズムと民主主義 ■ハイエクの習慣論 ■ネグリ／ハートの習慣論  
■社会運動と習慣 ■習慣のソーシャル化

### 第4章 民主主義の種子 153

#### 1 「社会を変える」仕事とは？ 154

■二〇〇〇年代の社会変革志向？ ■ソーシャル・ビジネスとは何か  
■社会問題解決のための新たな習慣 ■ソーシャル・ビジネスと政治 ■変革の担い手

#### 2 「島で、未来を見る」 167

■地域における実験 ■人口の1割がイタリーの島 ■「生き残りの戦略」  
■コミュニティデザイン ■「島で、未来を見る」

#### 3 被災地に生きる 181

■「弱い」信念 ■製鉄の町・金石の歴史 ■東日本大震災と復興  
■企業の「地元」化 ■「三陸ひとつなぎ自然学校」

おわりに プラグマティズムと希望

195

- オバマとプラグマティズム
- オバマの希望
- リチャード・ローティ
- プラグマティズムと民主主義
- 現代日本における「民主主義の習慣」
- 民主主義と希望

あとがき

211

民主主義のつくり方

はじめに

### 民主主義への不信

民主主義への不信が募っている。

ある人々は民主主義があまりに変わらなすぎると批判する。グローバル化とIT化が進む現在、社会の変化は早くなるばかりである。にもかかわらず、民主主義の対応はつねに遅く、なかなか必要な判断ができない。熟議は必要だろうが、いつまでたっても結論が出ないようでは困る。リーダーによるスピードある決断こそが大切だと人々は説く。

逆に、民主主義の変わりやすさを嘆く人々もいる。あげられるのは、二〇〇〇年以降の日本政治だ。○五年の郵政解散選挙で小泉改革を支持した民意は、○九年には民主党による政権交代を選択した。そうかと思えば、一二年の総選挙と一三年の参院選は安倍自民党の圧勝に終わった。不安定で移ろいやすい「民意」を信じていいものか。人々は不満を隠さない。ひょっとしたら、同じ人がこの二つの、あるいは矛盾するかもしれない民主主義のイメー

ジを口にしてしまふのが、現代なのかもしれない。そして人々は自問する。民主主義とはいったい何なのか。民主主義とは、私たちが信じるに足る仕組みなのか、と。

深刻なのは、現代の日本が高齢化と少子化の常態化した、いい意味でも悪い意味でも成熟した社会であるということだ。今後、日本社会にいろいろな変化が訪れるだろうが、人口が急激に増大し、再び高度経済成長が起きることだけはありそうにない。

人口が増え、経済が発展する時代には、激しい変化のなかでさまざまな矛盾が生じる。とはいえ、そのような矛盾は成長の影に隠れがちであるし、いずれにせよ、成長が最終的には問題を解決してくれると期待することも可能である。成長が続けば、その成果である富の再配分も容易だろう。実際、多くの独裁国家では、成長のなかで社会の中産階級が増加し、その発言力の拡大によって民主化が進んだ。

逆に、成熟社会の民主主義は、富や豊かさの再配分を期待できないどころか、社会を維持していくにあたっての負担を人々に再配分していかねばならない。とはいえ、消費税問題一つをとってみても、負担を喜んで引き受ける人などどこにもいない。はたして収縮時代の民主主義は、誰もが納得できるような解を示すことができるのだろうか。

民主主義とは、自分たちの社会の問題を、自分たちで考え、自分たちの力で解決していくことのはずだ。とはいえ、問題を直視することを避け、逡巡する民主主義は、安易な解決や

救世主を求めてさまよい続ける。どこにも引き受け手のいない民主主義の混迷は、深まるばかりである。

### 〈ルソー型〉民主主義の隘路

本書は、このような民主主義への不信が募る現代にあって、あえて民主主義を擁護するものである。その際、〈ルソー型〉から〈プラグマティズム型〉へと、民主主義像を転換することを目指す。とはいえ、〈ルソー型〉といい、〈プラグマティズム型〉といい、何のことだかよくわからない読者も少なくないはずだ。

ジャン・ジャック・ルソーとは、いうまでもなく、『人間不平等起源論』（一七五三年）や『社会契約論』（一七六二年）で知られる、一八世紀フランスの思想家である。ここでルソーの思想を詳しく説明する余裕はないが、彼の「一般意志」という概念は、近年あらためて注目されている。

ルソーは問う。すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、自由であり続けることは可能か。答えは社会契約しかないと彼はいう。すなわち、すべての個人は、他の個人と同一条件の下、一つの社会の構成員となる契約を結び、その社会の共通の意志に従うことを約束するのである。

問題は、社会の共通意志だ。もちろん、一人ひとりの個人には意志がある。とはいえ、それらはいわば、特殊意志に過ぎない。かといって、特殊意志をただ集計しても、ばらばらな個人の意見の総体であることに変わりはない。

ここでルソーは、「一般意志」という概念をもち出す。一般意志とは、ばらばらな個人の意志の単なる集計ではない。社会が真に一体になったときに現れる、「共同の自我」の意志こそが一般意志である。社会が一つの自我をもつというのは、いささかオカルト的にも響くが、ルソーはもちろん大真面目である。

それどころか、共通の意志である一般意志が各人の特殊意志と食い違った場合には、一般意志の方が優越するとルソーはいう。一般意志の方が正しいのだから、特殊意志はそれに従って当たり前というわけである。むしろ一般意志に従うことで、人は「自由であるように強制される」とさえいう。

ここらあたりから、ルソーの議論は怪しくなっていく。とはいえ、ルソーのロジックのどこが間違っているのかといわれると困る。多くの研究者が、さまざまな解釈を試みてきたが、いまだ共通の結論をみない。

一般意志とはいわば究極の理想であり、人々はそのには到達できないとしても、議論を繰り返すことで少しでも近づいていく、いわば目標のようなものであるという解釈がある。

それとは別に、現代のインターネット技術によって、はじめて一般意志の存在がリアルなものになったという考えもある。<sup>2</sup> ネット上に展開される多様な思考や感情のうち、Googleに代表される検索システムのアルゴリズムによって抽出された結果こそが、一般意志だというわけだ。

とはいえ、真に一体化し、共同の自我をもつに至った社会の一般意志というフィクションに頼ることなしに、民主主義を擁護することはできないだろうか。

もちろん、フィクションだからいけないというわけではない。むしろ、政治においてフィクションは不可欠である。実際に存在するわけではないが、それがあのかのごとく人々が振る舞うことで、一つの現実を生み出していくのがフィクションである。高度な知的作用としてのフィクションなしに、複雑な社会は維持できない。

とはいえ、民主主義にとって一般意志とは、そこまで不可欠なフィクションなのだろうか。一般意志というフィクション抜きに、民主主義を構想することは不可能なのだろうか。どうしても疑問は残る。

1——J・J・ルソー（桑原武夫・前川貞次郎訳）『社会契約論』、岩波文庫、一九五四年、三五頁。

2——東浩紀『一般意志2・0 ルソー、フロイト、ゲーゲル』、講談社、二〇一二年。

## 主権論を越えて

ポイントは主権論にあるのかもしれない。たしかに、君主主権から人民主権へというルソンの議論は、目覚ましい転回にみえる。とはいえ、担い手の変更にもかかわらず、社会の内外に対し、一つの優越的な意志が存在するという主権論のロジックには、いささかの変化もない。ある意味で、ルソーは主権論をそのまま継承し、その担い手を、君主から人民へと入れ替えただけともいえる。

後で検討するように、近代ヨーロッパの主権論は、宗教戦争のなかから生まれた。宗教上の対立が、ただちに政治的対立につながり、殺し合いの原因となる。そうだとすれば、異なった世界観を棚上げにするしか道はない。必要なのは、複数の世界観を超越する、一つの意志の存在であるという考えが主権論の背景にある。

ルソンの人民主権論もまた、このような主権論を受け継いでいる。人民全体の一般意志が、具体的な諸個人の特殊意志の上に君臨する——このようなイメージも、主権論に起因している。一般意志なるものが、実は自分自身の意志なのだといわれても、抑圧的であることに何ら変わりはない。

とはいえ、このような主権論を克服することは容易ではない。一つの優越的な意志がよくないなら、それを多元化し複数化すれば、それで済むというわけではない。互いに相容れない多様な意志の相克を克服するためには、さらなる政治の構想が不可欠である。結果として、現代においては、市場モデルで政治を語ることが一つの流行になっている。人々が議論を重ね、一つの意志を共有するというのは、たしかに無理なフィクションなのかもしれない。そうだとすれば、各個人がそれぞれの意志をもって、相互に無関心なままに行動するしかない。各自の自己利益の追求が、市場のような非人格的なメカニズムによって調整される、という考えの方が自然だというわけである。

さらには、各個人は自らの利益を合理的に追求し、そのような個人による選択がさまざまな制度を媒介として集積されることで、すべての政治現象が生起すると考える合理的選択理論も有力になっている。いずれにせよ、社会における意志の共有や、すべてに優越する一つの意志の存在を前提としないことがポイントである。

このような捉え方は、個人化が進み、人々の社会的な紐帯ちゆうたいが希薄化しているといわれる現代において、独特のリアリティと説得力をもつだろう。とはいえ、私たちは、共同の意思決定としての民主主義という理念を、完全に放棄してしまっていないのだろうか。人と人との対話や交渉の余地を極力少なくしようとすることが、唯一可能な政治的構想だといいい切ってしまう、何かを失うことにはならないのか。

繰り返すが、自分たちの力で、自分たちの社会を変えていくことが民主主義の本質のはずである。この理念を完全に放棄するとき、私たちは、端的に無力になる。どこかで誰かが、あるいは何らかのシステムが、自分たちの欲求を調整してくれることを期待している私たちは、すでに自らの運命を誰かに委ねてしまっている。

ここで少し、発想を転換してみよう。例えば、集団はもちろんのこと、個人においてさえ、一つの明確な意志をつねに当然の前提にできるのだろうか。人間とは、はるかに多様な情念に突き動かされている存在なのではないのか。そうだとすれば、民主主義を再検討するにあたっては、明確な意志の担い手としての人間像そのものを問い直すことが必要になってくる。さらにいえば、人間の意志とは、後になってみて、はじめてそのような意志があったと解釈することができるものかもしれない。実際のところ、多くの場合、当事者は各瞬間に自分が何を意志しているのかを明確に意識してはいない。意志とは事後的に発見されるものなのだという視点も、民主主義を捉えるためには必要なのではなからうか。

### プラグマティズムとは何か

ここで出てくるのが、〈プラグマティズム型〉の民主主義観である。

プラグマティズムというのは、アメリカが生み出した固有の哲学である。南北戦争後のハ

ーヴァード大学の周辺には、後の連邦最高裁判事オリヴァー・ウエンデル・ホームズ、心理学者としても活躍するウィリアム・ジェイムズ、さらに記号論理学者のチャールズ・サンダース・パースら、若き哲学者が集まった。彼らがつくり出したのがプラグマティズムという思考法であり、後に教育学者のジョン・デューイにも継承され、アメリカの精神的基礎の位置を占めるようになる。

とはいえ、プラグマティズムといえば、しばしば実用主義、あるいは道具主義と訳されるように、哲学的な原理はともかく、結果だけが重要であるという思想として表面的に理解されることが多い。ドイツ観念論のような重厚な哲学とはおよそ対照的な、思想としては浅薄なものであるという偏見も根強い。

しかしながら、プラグマティズムが、六二万人もの死者を出した南北戦争への反省から出発したことを忘れてはならない。プラグマティズムの創始者たちにとって、南北戦争とは何よりもまず、自らこそが絶対に正しいと信じて、信念を共有しない人々の存在を許さないイデオロギー的な対立の産物であった。

近代主権論が宗教内乱のなから生まれたとすれば、プラグマティズムは南北戦争後の荒廃から出発した思想である。とはいえ、プラグマティストたちは、人間にとつての信念を棚上げにしようとはしなかった。むしろ、人々の「信じようとする権利」（ウィリアム・ジェイ

ムズ)を最大限に重視したのが、プラグマティズムである。

生活の多くの場面で、人間はすべての証拠がそろう前に判断しなければならない。最終的な答えがわからないにもかかわらず、一つの選択肢に命運をかけることを余儀なくされることもしばしばだ。そのような決断こそが人間の宿命であるというのは、南北戦争を戦った世代にとっての実感であった。

問題は、人間が行動するにあたって選びとった理念が正しいことを、神学的・形而上学的に論証することではない。すべての人間には、自分の選びとった理念を追求する権利があり、重要なのはむしろ、そのような理念が結果として何をもたらすかである。

プラグマティストたちにとって、理念とは、人間が世界に適応し、世界を変えていくための実際的手段であった。人はある理念を選び、その理念をもつことによってはじめて世界と切り結び、世界を理解することができる。理念は人間と世界をつなぐ媒介なのである。

その意味で、プラグマティストを実用主義者と訳すのは、半分正しくて、半分間違っている。ある理念は、それ自体で評価されるべきではなく、あくまでそれを使い、実践することと不可分であるとする点で、たしかに彼らの思想は実際的であり、実用的である。人間は考えがあるから行動するのではなく、行動する必要があるから考えをもつと彼らは説いた。

とはいえ、プラグマティストたちは、人間の思想の中身をどうでもいいとはけっして考えられていなかった。心理学者のジェイムズは個人にとっての宗教的経験に着目し、論理学者のバースは、中世普遍論争における実在論<sup>3</sup>に深い共感を示した。彼らはむしろ、きわめて宗教的な人々であったのかもしれない。

ただ、プラグマティストたちは、ある理念がそれ自体として真理であるかどうかには、ほとんど関心をもたなかった。というよりも、それを真理であると証明することは不可能であると考えていた。そうだとすれば、ある理念に基づいて行動し、その結果、期待された結果が得られたならば、さしあたりそれを真理と呼んでもかまわない。彼らはそのように主張したのである。

重要なのはむしろ、各自が自らの理念をもつことに関する平等性と寛容性である。デューイによれば、各人は自らの運命の主人公であり、その運命にはあらかじめ決定された結論はない。人々が思想を徹底的に使い尽くすことこそが重要であり、だからこそ、その試みを尊重する必要がある。

さらにいえば、民主主義そのものが実験であり、実験の本性上、つまづくこともありえる。人民の単一の意志の優越という民主主義モデルから、実験としての民主主義モデルへの転換

3——中世ヨーロッパにおいて展開された哲学的・神学的論争。「普遍は存在する」と主張する実在論と、実在するのは個物のみであり、普遍概念は名のみであるとする唯名論の間で争われた。

が、ここにはみられる。

### 習慣の重要性

プラグマティストたちが強調したのは、理念や思想といったものが、あくまで社会的なものだということである。この点について、プラグマティストたちは、唯物論と観念論の両者を批判する。

まず、すべての理念を個人に属するものと考え、人間と人間の間に介在するものとして捉えなかったのが、唯物論の誤りである。このように論じたプラグマティストたちにとって、理念は個人的なものでも、内面的なものでもなかった。普通の諸個人の間にも広く共有されることで、理念ははじめて社会的なものとなる。

それでは、理念はどのようにして社会的になるのか。プラグマティストたちが重視したのが習慣である。人々は行動の必要にかられて判断し、事後的にその根拠を探る。そのような行動が繰り返され、やがてパターン化していくことで習慣が形成される。

もちろん、習慣といっても、人々が正確に同じ行動をするわけではない。人間をめぐる状況はつねに異なり、したがって行動も完全に同一なわけではない。とはいえ、多様な経験を繰り返すことで、人々は習慣を形成し、そのような習慣は最終的には一つの規範の周辺に集

まってくる。多くの人が納得し、意味があると思う習慣のみが生き残っていくからである。

そのような習慣が再生産されることで、社会の不確定性は次第に低下していく。社会全体をみて平均をとれば、一定の予測可能性も生じてくる。しかしながら、そのように安定した習慣のうちに体现される理念を見出し、そこからあたかも精神を实体であるかのように論じたのは、観念論の行き過ぎであった。理念は、あくまで行為においてのみ具現化されるものである。何も理念がそれ自体として存在して、世界を動かすわけではない。

プラグマティストたちは、世界を決定論的には捉えなかった。人間の世界に必然を認めなかった彼らは、純然たる偶然のなかから多様な習慣が生まれ、それらが定着していくことを通じて、次第に世界が安定化していくと考えた。

とはいえ、習慣は時間のなかで変化しないわけではない。たしかに、一定の繰り返しを通じて定着した習慣は、個人から個人へ、集団から集団へと共有され、継承されていく。一人ひとりの個人はそれと意識することなく、習慣を受け継いでいくのである。にもかかわらず、習慣は時間のなかで間違いなく変化していく。

習慣が極度に固定化され、変化しなくなれば、それは物質に近づいていく。硬直化し、化石化した習慣によってがんじがらめになった人々は、あたかも歳をとり、老化したようになる。ある国民は、つねに構成員が入れ替わる以上、それ自体として高齢化することはないが、

蓄積された習慣が固定化することで実質的に歳をとる。

逆にいえば、新たな習慣をつくり出すことによって、社会はつねに更新されていく可能性がある。教育において重要なのは、子どもたちの自由な創意を育むことであり、学校とは実験の場であると主張したデュイイは、新たな社会的実践によって民主主義をつねに再創造していくことを重視した思想家であった。

## 本書の構成

本書は、このようなプラグマティズムの思想を一つの導き手として、困難な状況に陥った現代民主主義の再生をはかるものである。その際にまず、プラグマティズムが重視した「経験」に注目する（第1章）。民主主義とは制度や理念である前に、一つの「経験」なのではなからうか。そうだとすれば、「民主主義の経験」を、私たちはいかにして取り戻せるのかを考えるのが、その目的である。

次に、現代民主主義の行き詰まりの背景にある、近代政治思想の隘路<sup>あいろ</sup>について考える（第2章）。主権論について指摘したように、近代政治思想の出発点にあるのは宗教内乱である。この宗教内乱を「克服」する過程で、近代政治思想は固有の特徴をもつことになった。このような特徴が、現代における民主主義論の困難の原因であるとすれば、それをいま一度再確

認しておく必要がある。

その上で、いよいよプラグマティズムの思想について詳しく検討する（第3章）。パース、ジェイムズ、デュイイらの考えたプラグマティズムとはいかなる思想であったのか。なぜ、その思想は民主主義論と結びつくのか。プラグマティズムの意義を、「習慣の力」と「信じようとする権利」を中心に検討する。

最後に、このようなプラグマティズムの思想が、なぜ現在の日本において意味をもつのかについて、考えたい（第4章）。プラグマティズムの優位性が示されるのは、何よりもまず市民社会における多様な結社、および地方自治の実践においてである。多様な社会実験の場としての社会的企業と地方自治の意味を考察することで、「プラグマティズム型」の民主主義の可能性を検討したい。

このような考察を通じて、民主主義を自分たちにとってより身近な、使い勝手のいいものにする、こと、いわば、「民主主義のつくり方」の道筋を明らかにすることこそが、本書の最大の目的である。

とはいえ、本書は決してノウハウ本ではない。あくまで原理的に「民主主義のつくり方」を考えていくことが、本書の唯一にして最大の課題である。一人でも多くの読者、とくに若い人に読んでいただけると、とてもうれしく思う。